



## 松平伊豆守信綱と野火止用水と金鳳山平林寺

シビル NPO 連携プラットフォーム常務理事 土木学会連携部門長  
土木学会 教育企画・人材育成委員会 シビル NPO 推進小委員会 委員長

メトロ設計(株) 技術顧問 田中 努

私の住まいの近くに「平林寺」があり、その北側に「野火止用水」が流れています。多くの場所で緑道になっていて、気持ちの良い散策路です。水の流れと緑の木々は、安らぎの必須アイテムです。

### 1. 野火止用水とは

「野火止用水」は、1655（承応 4）年、川越藩主松平伊豆守信綱により、野火止台地の新田開発<資料③>として開削された用水路で、<図 1>のように、「玉川上水」から、野火止台地を経て、荒川支流の新河岸川までの全長 24km に及びます。「玉川上水」と「野火止用水」の分水割合は「七分は江戸へ通じ、三分は信綱へ賜はり、領内へそゞげり（新編武蔵風土記）」と言われ、野火止の開拓民や移転してきた平林寺、陣屋等の貴重な飲料水・生活水として使われていました。

<資料①>



図 1：野火止用水の位置<資料②に加筆>

### 2. 野火止用水の歴史

地元、新座市のまとめ<資料④>によると、以下のようです。

徳川家康が江戸城へ入府してから 50 年程が経つと、江戸の人口増による水不足がおこり、1653（承応 2）年、幕府は多摩川から水を引く「玉川上水」を掘ることにしました。総奉行として老中の松平伊豆守信綱（当時川越藩主）が指揮し、難工事に人材投入をしたようで、翌 1654（承応 3）年に完成しました。

総奉行の信綱は、その功績が認められ、領内の野火止に「玉川上水」の分水を許されました。翌 1655（承応 4）年の 2/10～3/20 のたったの 40 日間で、関東ローム層の乾燥した台地、生活用水に難渋していた野火止の地に、用水が流れて来たとのこと。用水路は、素掘りにより開削されていますが、土地の低いところには「版築法」などにより堤を築いたそうです。費用は三千両とのこと。

#### ■版築法（はんちく）とは

中国から伝わった壁や土壇の築造法で、板で枠を造り、中に小石・石灰・ニガリ等を混ぜた土を少しずつ入れて枠で突き固め、塊にする工法のこと。現在、日本でも、左官工法の 1 つとして残っている。「版」は木の板で造られる枠、「築」は枠を意味し、城壁・河道堤防・軍営壁壘などの築造に用いられ、唐以前の万里の長城はこの工法によるという。

川越藩は、野火止の耕地を短冊形に区画して農民を入植させ、新しい 4 つの村、野火止・西堀・菅沢・北野（新座市）を創り、さらに周辺の他領 16 村をはじめ、松平家の一門や家臣まで開発に参加させるという大規模な新田開発を行いました。

その後、1662（寛文 2）年に新河岸川に懸樋をかけ、用水が対岸の宗岡（志木市）に引かれ、